

Title	モンゴルとその言語
Author(s)	橋本, 勝
Citation	言語学研究 (1992), 11: 257-260
Issue Date	1992-12-01
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/87965">http://hdl.handle.net/2433/87965</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

橋本 勝

### チンギス・ハーンの復権

モンゴルと言えばチンギス・ハーン（成吉思汗）とか広々とした草原やゴビ砂漠を連想する人も多いだろう。モンゴルはアジア大陸のほぼ中央部に位置し、旧ソビエトと中国に囲まれた海港を持たない完全な内陸国である。気候は大陸性であり、乾燥している。高度は高く、首都ウランバートルで海拔1400メートルぐらいある。

1921年にモンゴル革命が成功をおさめ外モンゴルは活仏ボグド・ゲゲーンを元首とする君主国として新たにスタートした。その後、数年を経てボグド・ゲゲーンは死去し1924年11月26日、正式の国名をモンゴル人民共和国と定める。それまでクーロン（庫倫）と言っていた首都名は現在のウランバートル（「赤い英雄」の意）と改められた。以来モンゴルは、旧ソ連について世界第2番目の社会主義国としての道を歩んできた。

ところが、ソ連のペレストロイカはモンゴルにも波及し1989年12月に始まった民主化が進んで今や政治・経済体制に大転換が生じて社会主義体制を離脱して中立化の道を歩んでいる。

1990年7月末には建国以来初の一般選挙が実施され長い間続いたモンゴル人民革命党（共産党）の一党独裁に終止符を打ち複数政党政治の体制が一応出来上がった。ペレストロイカの進行に伴って民族主義が台頭し従来マルクス主義の立場から侵略者のレッテルをはられていたチンギス・ハーンはすっかり名誉回復し復権を果たした。モンゴル民族を統一し空前絶後の一大帝国を築いたチンギス・ハーンは、モンゴルの民衆の心の中で常に消えることなく尊敬されてきたのである。

### 騎馬民族と食文化

モンゴル民族は本来、遊牧民族であったが、モンゴル革命以降、社会主義体制へ移行し集団化により遊牧の形態もずいぶんと変わり本来の遊牧とはかけ離れたものになった。農牧業の近代化はモンゴル民族の遊牧生活を大いに変質化した。近年、家畜の私用化が認められるようになった。ウランバートル等の都市に居住している人たちは日本の都市生活者とはほとんど変らぬ生活様式に従っている。騎馬民族にとって馬は大切な交通手段であり歴史的にも馬の役割は絶大なものがあつた。今のモンゴルの都市部では交通機関はバスであり馬を利用することはほとんどない。モンゴルの人たちは馬という乗物に慣れてきたせい、あまり遠くない所に行くのに歩くよりバスに乗る傾向が強いようである。

食文化というのは保守的であり比較的変りにくいと言えよう。我々日本人の食生

活の中で米や醤油、味噌は欠かすことができないものであるが、モンゴル民族にとって乳製品や肉は不可欠なものである。モンゴル人は調味料をほとんど使わない。勿論、塩は利用するが、薄味である。肉は骨付きで料理は脂濃い。モンゴル人は脂身を好んで食べる。脂身のない肉はハラ・マツハ（「黒い肉」）と言いあまり好まない。肉は羊肉を一番好む。その次に牛肉となる。豚肉は好まれない。モンゴルの羊肉は日本のものより臭いが少ないし牛肉より柔らかくて美味である。豚肉はスープが出ないのが好まれない一つの理由である。スープ入りの料理が好きでうどんの類は好んで食べるが、その中には必ず肉が入っている。やはりモンゴル人にとって肉のない料理は考えられないのであろう。肉好きのモンゴル人も年がら年中、肉を食べているわけではない。夏の季節は、肉は余り食わず、そのかわり馬乳酒（アイラグ）や乳製品が中心となる。乾肉はその時期かなり利用される。この乾肉（モンゴル語で「ボルツ」と言う）はチンギス・ハーン時代にも戦場などでの保存食料としても用いられた。飲料としては馬乳酒がよく知られている。これは6月末頃に作られる主として夏の飲料である。モンゴル語でアイラッグと言う。アルコール度は低いがビール程度はある。色は白濁で味は非常に酸っぱい。モンゴル人は子供の頃から飲み親しんでいる。滋養分が豊かであり医療用にも使われる。夏の季節、このアイラグだけで生活する人もいる。アイラグは完全栄養品なのである。日本の清酒に当たる醸造酒はシミーン・アルヒと言い、味も日本酒に近い。それを更に蒸留したものをアルヒと言う。これらは本来皆、家畜の乳が原料であるが、食品工場で作られるアルヒは小麦を原料としている。アルコール度は40度前後である。併し水や氷は入れずストレートで飲む。

モンゴルは完全な内陸国で海から遠く隔たり大気は非常に乾燥している。そのためかお茶をよく飲む。茶のことを「ツアイ」（或いは「チャイ」）と言う。モンゴル人は概して野菜をあまり食べないのでこのお茶がビタミン不足を補う役割も果たす。この場合も単なるお茶ではなく磚茶とミルクを鍋で煮立てて作った乳茶（モンゴル語で「スーティ・ツアイ」）である。来客には先ずこの乳茶でもてなす。肉、乳製品そしてお茶はモンゴル食文化の核をなしている。

#### ことばの特徴

モンゴル語の分布地域はずいぶん広い。先づモンゴル国（面積は日本の4倍余）、そして内モンゴル自治区（日本の3倍余）を中心とする中国の諸地域やロシア連邦内のブリヤート共和国やカルムイク共和国等がモンゴル語系の諸言語の話される主な地域である。モンゴル地帯から遠く離れたアフガニスタンのモゴール族の言語もモンゴル語系の言語である。総人口は約600万人と推定される。分布地域が広大なわりにはその話し手の数は少ない。方言の数はかなり多いが、モンゴル国の標準語の基をなすのはハルハ方言であり内モンゴルの標準語はチャハル方言をもとにし

ている。わけでもハルハ・モンゴル語がモンゴル語系の人たちの共通語的な役割を果たしている。ハルハ方言とチャハル方言の差はそれ程大きなものではなく日本語の東京方言と大阪方言の違いよりはるかに小さいと言える。勿論、一般のモンゴル人が聞いても理解出来ない特殊な方言群もある。例えば中国の青海省や甘肅省で話されるモンゴル（土族）語、ダウンシャン（東郷）語やバオアン（保安）語等はそのような言語に属する。

モンゴル語はチュルク語（広義のトルコ語）、満州・ツングース語と共にいわゆるアルタイ語族を形成する。印欧語のような屈折的特徴は殆んどなく膠着性に富んでいる。語順は主語－目的語－動詞の順であり類型的に日本語と同様である。語頭位に子音重複を避けるし又、語頭位にr音が来るのを嫌う。一語の内で男性母音（奥舌母音 a, o, u）と女性母音（前舌母音 e, ö, ü）が共存しないという「母音調和」なる形態音韻特徴がある。古代日本語にもこれに類似した現象があったことが知られているが、この特徴はアルタイ語族に非常に古い時代から存在し現在にまで受け継がれている。モンゴル語の歴史は一般に古代（A.D.12世紀末まで）、中世（13世紀～16世紀末）、近代（17世紀以降）の3期に分類する。古代モンゴル語の文献はない。中世モンゴル語の文献は、かなり豊富でありその研究も進んでいる。最大の資料は『元朝秘史』（『モンゴル秘史』）である。著者は不明でありその著作年代は一般に1240年といわれているが、学界では異論がある。モンゴル語は英語等の印欧語に比べてそれ程大きな変化を遂げてはいない。語構成は語幹＋接辞からなる。接辞は接尾辞のみであり接頭辞、接中辞はない。例えば「彼は来なかった」という文はモンゴル語では *Ter irsengüi*. (*Ter* : "彼は", *ir-* : "来る"（動詞語幹）、*-sen* : 完了接辞、*-güi* : 否定接辞）となる。お気付きの如く日本語の場合、動詞語幹＋否定接辞＋完了接辞となるのに対してモンゴル語では動詞語幹＋完了接辞＋否定接辞の配列となる点が異なる。動詞語幹は屈折しない。子細な点では異なるが、概ね文法構造は日本語に類似している。主語は必ずしも明示されない点も同様である。日本語は高低アクセント言語であるが、モンゴル語は強さアクセントが支配的である。原則として第一音節にアクセントがあり第二音節以下に長母音や二重母音が来ればそこにアクセントが移動する。従って英語やロシア語のようにアクセントの位置によって語の意味や機能が変わることはない。第一音節の母音は常に明瞭であり第二音節以下の短母音は曖昧母音となりそのきこえ(sonority)は極めて不明瞭である。

#### 民族主義と文字改革

モンゴル民族は一体いつ頃から文字を持つようになったのだろうか。チンギス・ハーンは空前のモンゴル帝国を築いたが、帝国を成立させる為には文字は欠かせないものであった。中国の史書『元史』によれば1204年にチンギス・ハーンがナイマ

ン部を征服した際に捕えた塔塔統阿なる人物を側近におき、モンゴル諸王の子弟にウイグル文字でモンゴル語を書写することを教えるよう命じたとある。一般にそれがモンゴル文字の起源とされている。つまりモンゴル文字はチュルク系のウイグル人が使用したウイグル文字を借り入れたものでありウイグル文字はイラン系のソグド人が用いていたソグド文字を借用したものであった。またソグド文字は北セム文字の一つ、アラム文字に来源する。

モンゴル文字で記された最古の資料は、いわゆるチンギス・ハーン碑文であって西暦1225年頃にさかのぼる。ただ、チンギス・ハーン碑文の正書法の首尾一貫した特徴から考えて、多分、西方のモンゴル族の間には1204年よりかなり早い時期にウイグル文字が伝えられたものと推定される。チンギス・ハーン以来のこの文字は現在でも内モンゴルでは公用文字として使用されている。モンゴル国（旧モンゴル人民共和国）では1940年代に文字改革に踏み切りこのモンゴル文字よりキリル（ロシア）文字に切換え新しい正書法が立案され施行されてきたが、近年の政治・経済の大改革は民族主義の高揚を促しモンゴル文字復活の動きが今や急速である。モンゴルのテレビ放送でも1週間に2回モンゴル文字講座がありモンゴル文字教育に一役かっている。1990年より小学校第1学年からモンゴル文字の授業が課せられるようになった。1994年には現在のキリル文字からモンゴル文字に全面的に切り換えることになっていたが、諸般の状況から大幅に遅れることは必至と思われる。

モンゴル文字は本来不完全な音素文字であり文字と音声との間に曖昧で不規則な点が多くその語の発音を知らないと言えない等の難点がある。ここ数年でモンゴル文字復活が全面的に可能かと言えはやはり困難だと思う。一般のモンゴルの人々が自由にモンゴル文字が読み書き出来るようになってそれは初めて可能になる。キリル文字、モンゴル文字併用の過渡的な時期がかなり続いた後に達成されるだろう。1930年代スターリン主義者らの過激派によりラマ教徒たちは迫害され寺院は破壊されモンゴルの重要な文化遺産さらにはモンゴル民族の伝統文化そのものがこわされた。これはモンゴル民族にとって大きな不幸であった。

当面の文字改革に色々困難な問題を伴うことは避けられないが、このモンゴル文字復活はモンゴルの人たちの民族意識からすれば当然の帰結と言える。このことによりモンゴル国と内モンゴルのモンゴル人の相互のコミュニケーションが強化されることは間違いない。民族のアイデンティティの面でも大いに貢献するであろう。文字の持つ意味の重大さを今さらながら深く考えさせられる。

（はしもとまさる、大阪外国語大学教授）